

『屍の街』はどのように読まれてきたか？

中野和典

一 はじめに

これから戦後七〇年連続ワークシヨップⅦ「原爆文学」古典「再読3——大田洋子『屍の街』」を始めます。私は司会を務めます中野です。よろしくお願ひします。最初にこのワークシヨップの進め方について簡単に説明します。

まず、私が『屍の街』はどのように読まれてきたか？ということについてお話しします。続いて、長野秀樹さんと柳瀬善治さんに、それぞれの視点から問題提起をしていただきます。三名の持ち時間はそれぞれ二〇分ずつで、計六〇分になります。

ワークシヨップ後半の六〇分は全体討議を行います。前半三人の発言を受けて、あるいはそれとは異なる視点から『屍の街』について意見を交換したいと思います。今回の再読を通じて『屍の街』にはこれから読み継いでいくべきどのような価値があるのか、あるいはないのか、午後のワークシヨップのテーマである「広島

から問う、「原爆文学」と「戦後70年」も念頭に置きながらここにお集まりのみなさんと『屍の街』について率直に語り合いたいというのがこの企画のねらいです。

それでは、さっそく私の報告に入ります。突然ですが『屍の街』28章には次のような記述があります。(七十五年間広島に棲めないうという、はし折った数字のセンチションがかなり有力になっていた。少しへんな気がしたけれど、これに対してある日の新聞の二面のトップに、／「嘘だ、七十五年説」／とべたつと大きく書き出された)。原爆投下から七〇年間、あるいは七五年間は広島に住めないという噂うわさがあったことは、『屍の街』に限らず、多くの文献に記されています。このような言葉に向き合うとき、今日、こうして私たちが被爆後七〇年目の広島市で『屍の街』を読みかえしていることの意味を考えずにはいられません。

もちろん厳密に言えば、『屍の街』に記されているのは七〇年ではなく、七五年ですので、本当はあと五年後にこの企画をやった方がよかったのかも知れませんが、他の文献には七〇年人間が

住めないとよく書かれてもいるので、早すぎるということはないと思います。

この七〇年間という時間の長さは、原爆という未知の兵器もたらした不安の大きさを表しています。そもそも広島を破壊したのが原爆でなかったならば、七〇年間も人が住めなくなるかもしれないなどと心配することは起こりえません。この時間の長さには、その噂がささやかれていた当時において、原爆がいかに得体の知れない、無気味なものであったかがよく表れています。

翻って被爆後七〇年の現在、『屍の街』に引用された「嘘だ、七十五年説」という新聞記事の言う通り、実際にはひとときも途切れることなく広島には人が住み続けてきました。七十五年説というのは、まさに杞憂(きゆう)に終わったのです。しかし、七〇年後の現在、より広い視野で原爆投下に端を発する核の脅威が過ぎ去ったのかと考えると、それは否(いな)と言わざるをえません。『屍の街』では七五年という時間は原爆の脅威が過ぎ去る一つの節目として語られています。その後の核をめぐる流れを考えると、私たちはむしろ七五年では片づかない、より深刻な事態に陥ってしまっているようにも見えます。『屍の街』で語られた七五年説は確かに外れたわけですが、その外れ方は七五年を超えてむしろもっと悪い方に外れてしまっているとも言えるのではないかと考え込まずにはいられません。

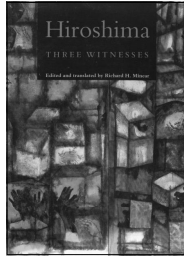
前置きが長くなってしまいました。まずは『屍の街』の図書情報を確認します。『屍の街』は雑誌に掲載されることなく、一九四八年一月に中央公論社から単行本として出版されました。このときにはGHQのプレス・コードを憚(はば)かして「無欲顔貌」の章

が削除されています。その後、一九五〇年五月に「無欲顔貌」の章を補い、字句を大幅に訂正して冬芽書房から再刊されました(このとき章題も「街は死の檻(ぼろ)籠(かご)籠(かご)」が「街は死体の檻(ぼろ)籠(かご)籠(かご)」に変更された)。これが『屍の街』の完全版と呼ばれているテキストです。その後、ご覧の通りに再刊されて現在にいたります(『屍の街』(河出書房(市民文庫)、一九五一・八)／小田切秀雄編『原子力と文学』(大日本雄弁会講談社、一九五五・八) ※抄録「運命の街・広島」)／『屍の街』(河出書房(河出文庫)、一九五五・九)／『日本現代文学全集 第一〇六 現代名作選 第2』(講談社、一九六九・六)増補改訂版、一九八〇・五) ※抄録「運命の街・広島」)／『屍の街』(潮出版社(潮文庫)、一九七二・七)／大田洋子集 第一巻(三一書房、一九八二・七)／『日本の原爆文学 2 大田洋子』(ほるぷ出版、一九八三・八)／*Hiroshima: three witnesses, edited and translated by Richard H. Minear* Princeton University Press, 1990)／『屍の街』(ヒロシマ)文学を読む会、一九九二・四 ※八〇〇部のみ)／『ふるさと文学館 第40巻 広島』(ぎょうせい、一九九四・二)／『屍の街・半人間』(講談社(講談社文芸文庫)、一九九五・七)／『作家の自伝 38 大田洋子』(日本図書センター、一九九五・二)／『屍の街』(日本ブックエース(平和文庫)、二〇一〇・七)／『コレクション戦争と文学 19 ヒロシマ・ナガサキ』(集英社、二〇一一・六)／『屍の街』(アイティメディア株式会社、二〇一四・九) ※電子版)。なお、本文の異同については浦西和彦「解題」(『大田洋子集 第一巻』三二書房、一九八二・七)が詳しい。

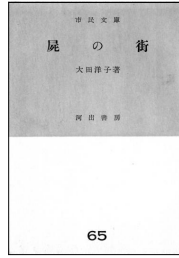
書影も代表的なものだけ載せています。一番右上が初版、その下がいわゆる完全版、上段右から三つ目が英訳版のものです。



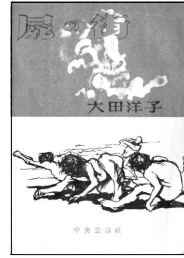
平和文庫 2010
表紙: 粟津潔
『羽ばたく鳥たち』



Princeton University Press
1990 表紙: 丸木位里・丸木俊
『原爆の図 第12部 とうろく流し』



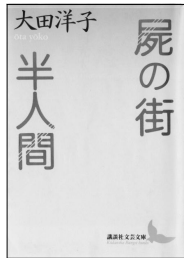
市民文庫 1951



中央公論社 1948
装幀: 福澤一郎



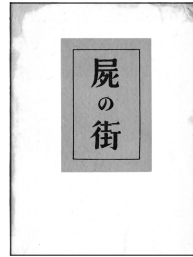
ITmedia名作文庫 2014
表紙: 別所洋輝



講談社文芸文庫 1995



潮文庫 1972
表紙: 丸木位里・丸木俊
『原爆の図 第5部 少年少女』



冬芽書房 1950
※箱表紙

研究文献については、今回も集められるだけ集めました(本稿末尾の『屍の街』研究文献「一覧」参照)、まだ読み落としていたものもあるかと思えます。不備がありましたら、教えていただければ幸いです。ざっと見てすぐ気がつくのは、他の年代に比べて一九六〇年代に書かれた文献が大変少ないことです。特に一九六三年に大田洋子が亡くなってからの一〇年近くは、ほとんど忘れ去られたかのようにさえ見えます(大田洋子は一九六三年二月一日、福島県猪苗代町で取材中に心臓麻痺のため没した)。しかし、一九七〇年代以降にはまた文献が増えます。このことについては後ほど考えます。その後、現在にいたるまで計一五〇を超える文献があることを今回確認しました。昨年、私が担当した井伏鱒二『黒い雨』研究文献ほど多くはありませんが、それなりに多い数であると言えます。

二 造形をめぐる評価

ここからは研究文献の中から重要と思われるものを「造形をめぐる評価」と「主体をめぐる評価」という二つの観点から整理し、最後に「残された課題」を示したいと思います。

まずは造形をめぐる評価の問題について見てゆきます。佐伯綾子「『屍の街』に寄す」(『中国新聞』一九四九・三・六)は、最も早く書かれた『屍の街』評の一つです。著者の佐伯綾子は『屍の街』の中に何度も実名で記されている人物として、私が数えたところによれば大きく数えて七カ所、細かく数えたとフルネームで一五回以上記されています。その佐伯綾子が、これもまた『屍の

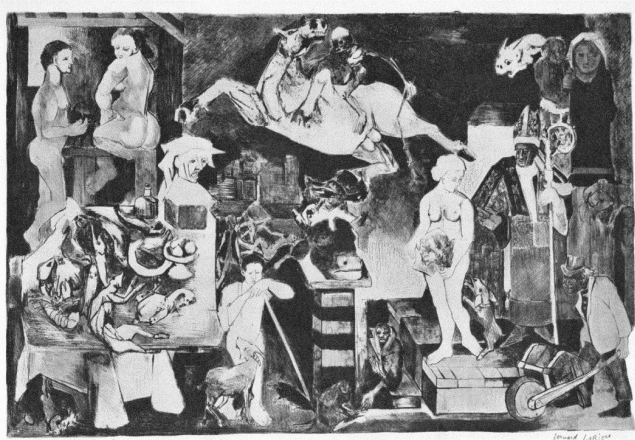
『街』の中で多く引用される「中国新聞」紙上で『屍の街』に応答しているという興味深い文献です。ここで佐伯綾子は〈この『屍の街』原爆手記も、婦人作家の感覚を逞して書かれてあると一種の香りがある。あの混乱のさ中でも病苦を押しつけてメモを取つたらしい作家魂を、やっぱり彼女は違ふと感心しても見る〉(作品後半の死に脅かされつつ生きてくる者の心理はよく描けている)と『屍の街』の美点を指摘しながら〈欲をいえばもつと爆心部も歩いて見て来てほしかったが、それは負傷した女の身では無理かも知れない、そんなことをしていたら今ごろ生命はないかも知れない〉と爆心部の描写がないことを欠点として指摘しています。

大田洋子「序」(『屍の街』冬芽書房、一九五〇・五)は『屍の街』完全版が出たときに書かれた大田洋子による自作解説です。ここで大田は佐伯綾子が欠点として指摘した爆心部の描写の不在を〈私の筆は全市にくりひろげられてはいないのである。自分の住んでいた母の家からのがれ出して、三日間を野宿した河原と、田舎へ逃げて行く道中の情景とのきわめて部分的な体験しか書いていない〉と認め、さらに〈私は「屍の街」を小説的作品として構成する時間を持たなかつた〉と『屍の街』が小説として構成できていないものであること、〈なんと広島、原子爆弾投下に依る死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために必要な、新しい描写や表現方法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない〉と原爆投下で出現した状況を描くには新しい方法が必要であること、〈広島、歴史的不幸が、歴史的な意味を避けては考えられないことを思うとき、小説と云えども、虚構や怠惰はゆるされない。原型をみだりに壊さず、真実の裏づけを保って小説

に移植されるべきであろう〉と虚構ではなく「真実」の裏づけを保つ小説を書くべきであることなどを語っています。つまり原爆という新しい出来事を描くためには新しい表現が必要だが、死に瀕していた自分にはそれを追求する時間がなかつた、と描く対象だけでなく、描く方法にも課題が残っていることを認めています。

このような大田洋子の消極的な自作解説に反して、佐々木基一「『屍の街』解説」(『屍の街』河出書房(市民文庫)、一九五一・八)は〈数ある原子爆弾に関する記述のうちで、文学的にみて、この作品は故原民喜の『夏の花』と共に最もすぐれた記録の一つである〉と『屍の街』を最も優れた記録文学として絶賛します。新聞記事が多く引用されることについても、〈この作品の中に、原子爆弾に関する科学者たちの報告がとりいれられながら、その冷たい科学的報告が血の通う生きた言葉として全体の中に造型されていることに注意してほしい。作者は全く新しいそうした事件を描くための新しい小説の形式がみつからぬと嘆じているが、ほとんど作者が小説としては考えなかつたこの手記が、そのまゝの形で新しい形式への萌芽を示していると言えるのである。こんご生まれべき、またげひ生れる必要のある新たな記録文学に対して、この形式は示唆するものを多くもっている。いまま少し意識的方法にまで進めば、カミュの『ペスト』の如き作品へはほんの一步のところまで来ているのである〉と科学的報告を採り入れながらそれを生きた言葉として造形した新しい形式の萌芽になっていると積極的に評価し、『屍の街』をカミュの『ペスト』に近いものとして位置づけます。

しかし、花田清輝「原子時代の芸術」(『世界文化年鑑』1955)

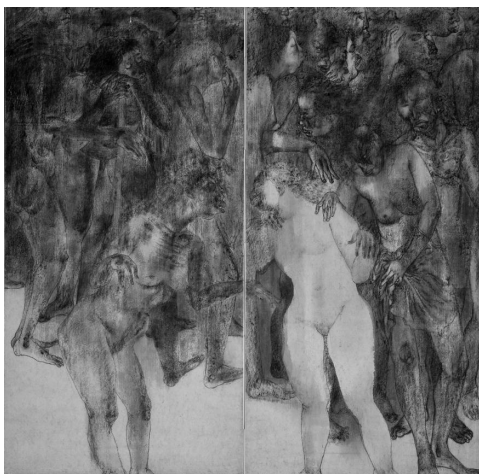


ベルナルド・ブルジェ『原子時代』の1つ(『みずゑ』1954年12月号9頁掲載)

たいと嘆息するが、どうしてかれらは、「幽霊」といえば、封建時代の「幽霊」だけしかおもいかべないのであろう」と『屍の街』は私小説と封建時代の幽霊という古い方法によりかかっている。花田によれば典型とは「われわれの内部世界における具体的

平凡社、一九五五・三は『屍の街』と『ベスト』との違いを強調します。花田によれば「たいいての「原爆文学」は、依然として、古めかしい私小説的方法によりかかっている」(大田洋子の『屍の街』の女主人公も、被爆後、鏡をみて、『四谷怪談』のお岩み

というロルジュの『原子時代』であり、カミュの『ベスト』です。花田は『原子時代』と『原爆の図』、『ベスト』と『屍の街』を比較しながら、『屍の街』を細部の真実を追求しているだけの作品であり、「典型についてはいうまでもなく、事実の即物的描写についてさえ、はなはだ不十分なものがある」と批判しています。花田清輝の批判に反論したのが中島健蔵「原爆文学」の意味(「心」一九七八・六)です。中島は「大田洋子の『屍の街』と、カミュの『ベスト』とをならべて、暗に『屍の街』をおととしていいるのはまちがっている。これは全くの別物である」(芸術性の問題ではなく、芸術を成り立たせる事情が、ほかの作品とは違うのである」と『屍の街』の「文学以前の条件、あるいは作品を



丸木位里・丸木俊『原爆の図 第1部 幽霊』1950年(部分)

なものとして象的なもの(統一物)である、というところにあります。その典型化の例として挙げられていのが、花田が「みずゑ」一九五四年一月号で見た

成立させた条件)つまり原爆投下という事件が特殊なものであるから、『ベスト』とは比べられないと論じています。花田清輝が論じているのは表現の方法であり、中島健蔵が論じているのは表現の対象なので、二人の論点はすれ違っていることとなります。

栗原貞子「大田洋子以後」(『核時代に生きる』三二書房、一九八二・八)は『屍の街』の表現方法に対して、(その時の全体を表現するためには、生まな記録や素材を投入することも、妙に飾ったりひねくったりする文学表現よりも効果的である)と体験や新聞記事などの記録的な素材をそのまま挿入することの効果強調しています。これは一九八〇年代に起きていたいわゆる第三次原爆文学論争のときに、林京子の作品が大田洋子の作品のように(「小説ではない」、「事実性のみを書いたものである」、「原爆のことを書けばイコール文学というのか」という酷評)を受けたことへの反論として書かれた論です。原爆を表現するには記録的な素材をそのまま挿入することが効果的であるというこの栗原論は、前に見た佐々木基一論に近いものです。記録と小説を対置して、原爆の表象においては記録性が勝つていてよいのだ、と主張していることとなります。

ジョン・W・トリート「大田洋子と語り手の位置」(『グラウンド・ゼロを書く』水島裕雅他訳、法政大学出版社、二〇一〇・七)は、「記録か小説か」という問題を「記録か証言か」という問題として捉えなおしています。トリートは(『屍の街』は「証言作品」*testimonial*)であり、ある意味ではドキュメンタリーとは区別される必要がある。／ドキュメンタリーと証言作品とは事実に対する関心を共有している。両者においては歴史的真實性が最も価値

のあるものであり、実際それは作品の決定的特徴である。しかし、証言作品においては、ドキュメンタリーと違って、これらの事実を語り、考える、はっきりと特定された語り手という主体によって提示される明白な主張がある)と『屍の街』を客観的記述を目指した記録ではなく、明確な主張を持つ語り手によって語られた証言として位置づけます。そして(普通は私たち「読者」が犠牲者(被爆者)へのとりなしをするのであるが、被爆者である作者は、ヒロシマの物語を構築する時に私たちを捨て去る。つまりヒロシマの物語の中では、私たちは作中人物としても存在しないし、解釈することができる読者として重要な役割を演じることもできない)と『屍の街』の語り方は非被爆者からの解釈を拒むものになつていることを強調します。つまり、読者には解釈できないことを語るることによつて被爆体験の特異さや理解しがたさを逆説的に語っているという論です。トリートはそもそも被爆体験を描くことができるのか、といういわゆる表象可能性の文脈に置いて、語りえないということ語っているテキストとして『屍の街』を捉えなおすという新しい論点を示しています。

村上陽子「原爆文学と批評―大田洋子をめぐって」(『言葉が生まれる、言葉を生む』ひろしま女性学研究所、二〇一三・八)は(問い直されるべきは現実の状況に向き合った創造的な批評を生み出せず、既存の価値観に安住していた批評の言葉の貧しさの方だ)と『屍の街』が既存の文学表現の及ばない出来事を描こうと模索したのに見合う形で、それを読む側は既存の解釈方法を超える批評を創り出したのかという問いを提示しています。これを踏まえて村上は記録か小説かという(二項対立に陥らないかたちで

大田の作品の読みを深めていくことが、創造的な批評の場を切り開くことにつながるのだ」と指摘しています。これまで見てきたように『屍の街』に対する評価の論点はかみ合わないままになっているところがあるので、これは重要な課題設定であると思えます。以上、『屍の街』の造形をめぐる評価について見ました。

三 主体をめぐる評価

次に見たいのは、主体をめぐる評価、つまり『屍の街』を書いた大田洋子とそれを読んだ読者の主体をめぐる問題です。先ほど研究文献一覧を紹介したときに触れましたが、『屍の街』は一九六〇年代にはほとんど顧みられない作品になっていました。「この本の中で 6 「屍の街」と大田洋子さん」（『中国新聞』一九六三・八・一）という記事は、大田洋子が亡くなる約四ヶ月前に掲載された、まさに最晩年のものです。ここで大田洋子は（原民喜、峠三吉それに私の作品―原爆文学と言えるものは文学全集に加えられていないんですね。みんな文庫本とか単行本で絶版になっていますが、どういうことでしょう。不つごうだと思っんですよ。考えたくないけど原爆の問題にはふれたくないという政治的な配慮があるんじゃないかなろうかとかんぐりたくなるほどです）と自分の作品が絶版になり、読みにくい状態がつづいていることを憂い、（アメリカで『屍の街』を出版したい、という話はあったのですが、いざとなると実現しません。反アメリカ的な作品とみられているようですが、あの作品に反アメリカとか親ととかいったような政治的な意味があるわけではありません。原爆にしいた

げられた人間を描いたものなのです）とアメリカで『屍の街』を出版したいという希望を語っています。そして（自作で一番愛着を感じるものは）という問いに（『屍の街』ですね）と答えています。発表当初の自作解説では自ら欠点を語りながらも、最晩年の大田洋子が最も愛着を感じていたのは『屍の街』だったということが分かります。

しかし、なぜ『屍の街』は一九六〇年代にほとんど顧みられなくなってしまったのでしょうか。この問題は簡単には解けません。江刺昭子「放浪への出発」（『草薙』評伝 大田洋子―大月書店、一九八一・七）は（戦中の言動に関する反省の色は全くないと言っている。それをきれいに頬冠りしておきながら、戦争の被害だけを声高に言いたっている。（略）このことが、中央、広島を問わず文壇の洋子の不信の根を形成していたと思うが、洋子自身の作家活動のより大きな成長をも阻んでいたのではないかと思う。そして、このことにもつながってくるが、『屍の街』で露にし、『人間檻樓』でそれを広げ、『半人間』で凝結させ、『夕風の街と人』で更にまた発展させていった怒りの正体の問題がなかったらどうか）と高度経済成長にもなつて戦争が忘却されてゆく中で、大田洋子自身が戦争中の戦争協力を反省しなかったことをその原因として指摘しています。『屍の街』に記されている怒りが、大田洋子が自らの戦争協力を不問に付したまま発せられたものになつているため、読者の不信を招いたのだと言うのです。これは『屍の街』の表現対象や表現方法への批判とは異なり、表現を支える文脈として重要視される大田洋子という作者への不信感がそのまま『屍の街』というテキストの説得力を貶めて（おとし）いるという

指摘です。

さらに栗原貞子「非運の作家大田洋子への傷み」(現代の眼)一九七八・七)は(洋子の原爆文学に対して文壇の人たちが冷やかだつたのは、戦争中良心的な作家が筆を折っている時、皇軍慰問のため中国に行き二カ月も慰問旅行したり、戦争協力のエッセイや小説を華々しく新聞や雑誌に発表し、何冊もの単行本を戦争中に出版したりした彼女が、戦後は戦争の被害者として、原爆の苦悩を書いたことに対する不信だつたのではないか。／そうしたことを踏まえて『屍の街』を読むとき、随所に見られる軍部批判や日本人批判など、彼女の歴史を知っている人たちは、鼻じろむ思いであつたにちがいない。／しかし多かれ少なかれ戦争協力を強制された文壇人はあからさまにそれを批判することが出来ないまま、背を向けていたのではあるまいか。彼女がしばしば表白している劣等感とは、被爆者であることのそれよりも、前歴の戦争協力のうしろめたさであり、それが劣等感になつていたのではあるまいか)と大田洋子だけではなく、彼女の作品を批評する文壇人の側にも自らの戦争協力への後ろめたさがあつたことが、『屍の街』に背を向けることを招いたのではないかと指摘しています。

川口隆行「原爆文学という問題領域」(『Problematic』(文学／教育)二〇〇一・七)は『屍の街』の読者の問題を栗原貞子が指摘した文壇人の問題から、より広い読者層へ広げて考察しています。これは昨年の『黒い雨』再読のときに考えたことを、『屍の街』の側からもう一度考え直すことになりましたが、一九七〇年代に『黒い雨』や『夏の花』が国語の教科書に採録されたのに対して『屍の街』は採録されませんでした。その背景には(激しい身

振りゆえに、「原爆乙女」という紋切型の記憶に押し隠された暴力の起源を想起させ、他者に記憶の分有を執拗に迫るもの)である(怒れる大田洋子)というイメージを抑圧する力が働いており、それは(トラウマ記憶から物語記憶への変換、ある種の社会的合意形成が行われた)ことの現れではないかと、川口は論じています。なぜ一九六〇年代に『屍の街』は読まれなくなったのか、『屍の街』の「怒り」が抑圧され、そこに一九六五年に書かれた『黒い雨』の「平常心」が置き換えられるという社会的な合意形成が、文壇人だけでなく教員や生徒といつたより広い読者層も含む形で行われたためなのだと思えば、これはより深刻な問題であることになります。

江刺昭子や栗原貞子が問題にしたのは大田洋子の戦争協力、いわば戦争加害の側面だったので、花田俊典「原爆言説の日本的形成―記憶の形成と証言台の証言人」(『原爆文学研究』二〇〇二・八)は(隠蔽記憶は戦争の加害行為の場合だけでなく、被害の場合にも作用するだろう)と『屍の街』には被害の記憶の隠蔽も読み取れると指摘しています。『屍の街』の語り手が(私の心には倒錯があるのだ)(5章)と認める通り、(原子爆弾をわれわれの頭上に落したのは、アメリカ力であると同時に、日本の軍閥政治)(5章)であると言つてアメリカより日本の軍閥政治を責めるというのには倒錯と言わざるをえません。この倒錯は『屍の街』に限つたことではなく、(アメリカを不在にしたまま、大田洋子の、いや戦後日本の大きな原爆物語が編み込まれていることは、やはり倒錯的なのである)と日本の大きな原爆物語が倒錯を抱えたまま成立しているのだと花田俊典は論じています。

このように近年は『屍の街』というテキストだけでなく、それを取り巻く作者や読者の主体、さらには戦後日本社会のありようとそこに含まれている問題を追究する論が書かれるようになっていきます。

四 残された課題

最後に残された課題について述べます。課題については研究史をたどる中ですでにいくつか指摘していますが、その他に私が個人的に興味を感じている問題を二つ挙げます。その一つは『屍の街』の表現の細かな問題についてです。黒古一夫「戦後・ある呪詛と怒りの構造―大田洋子の場合」(『新日本文学』一九七七・四)は『屍の街』の構成に注目しています。『屍の街』の構成は大きく(1)被爆から約一カ月後の話、(2)被爆当時の話、(3)被爆から約一カ月後の話というものになっています。黒古一夫は「大田洋子はこの作品の構成という点にだけ、彼女の作家意識を働かせることができたのである」とこの構成に着目しながらも、『屍の街』の構成は被爆後を記した(1)と(3)にはさまれて(2)の体験記・見聞記が綴られるという、「回想記」によく使われる方法が採用されている。この方法は、ありきたりで、特に取り上げることもない)と否定的に捉えています。しかし、「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1 9」(『中国新聞』一九八三・七・二二)という記事は『屍の街』の構成を、被爆から約一カ月後から語り始めることによつて(原爆が決して「あの日」の広島に限った問題でないこと)を強調したものとして積極的に評価しています。『屍の街』の時間

構成を被爆体験の特異性を表すものとして捉えているこの記事の構成の方に私は説得力を感じます。

また、この記事で紹介されている方言の問題も興味深いものです。記事には「屍の街」の冒頭の方に階下の八つになる女の子が出てくる。洋子が「あの青い光をあなため見たの」と聞くと、「見た見たア。はつきり見たけエ。うちのおじいちゃんのはウ、畑を打ちよつたら、畑が光つたけエ、畑の底が火事かと思うてのウ、土を掘つて見た」と答える。この女の子が、松本店の娘の小田洵子(四五)である。「確かに私がしゃべったことが書いてある。ただ、私は広島市育ちだったので、作品の中のように強い方言は使わなかったはずだが」と言う)と紹介されています。

『屍の街』の語り手は一貫していわゆる標準語で語っているのに対して、他の登場人物たちの語り口は方言であったりなかったりと不統一です。そこにどのような力が働いているのか。また、先に述べた通り、語り手は佐伯綾子という名前を一五回以上も語る一方で、旧知の医師をS氏と呼んだりもします。このような呼び分けがなぜなされているのか。後に大田洋子が広島市をH市と記すようになることと合わせて気になる問題です。このような一見瑣末に見える表現上の問題に注目した『屍の街』論がもっと書かれてよいと思います。

残された課題としてもう一つ示したいことは、『屍の街』のアメリカにおける受容です。これも先に述べた通り、大田洋子は『屍の街』がアメリカで出版されることを望んでいましたが、それは一九九〇年の英訳本(Hiroshimathree witnesses)の出版によって実現されることになりました。英訳を手がけたリチャード・H・マイ

ネアは「私にとつての広島」「屍の街」英訳に当たつて」（『中国新聞』一九八三・六・二二）において（アメリカをはじめ多くの国の人々が、大田の苦痛や悟りを理解し、核兵器について再考することに貢献）することを目指すことを目指すと抱負を語り、「ヒロシマ—三人の証人 米國で英訳出版」（『中国新聞』一九九〇・四・三）でも（ヒロシマの痛みと願いが（略）作品を通じて米國人らに伝われば）と語りました。日本で『屍の街』の初版が出てから約四〇年後にアメリカで英訳版が出版されることになつたわけですが、果たしてアメリカでどれほどの読者を得られたのでしょうか。大田洋子がアメリカでの出版にこだわっていただけに、読まれているにせよ、いないにせよ、その反応は気になるところです。以上で私の報告は終わります。

『屍の街』研究文献一覧

- 【一九四〇年代】 1 佐伯綾子「『屍の街』に寄す」（『中国新聞』一九四九・三・六） 【一九五〇年代】 2 大田洋子「序」（『屍の街』冬芽書房、一九五〇・五）／3 大谷藤子「大田洋子『屍の街』（朝日新聞）一九五〇・六・一）／4 原民喜「『屍の街』（発表紙不明。新聞切り抜き）『原民喜全集 第二巻』芳賀書店、一九六九・九↓『日本の原爆文学』1『ほるぶ出版、一九八三・八』／5 佐々木基一『『屍の街』解説』（『屍の街』河出書房（市民文庫）、一九五一・八↓『屍の街』河出書房（河出文庫）、一九五五・九↓『日本の原爆文学』2 大田洋子『ほるぶ出版、一九八三・八』／6 江口渙「文芸時評」（『新日本文学』一九五二・二）／7 志条みよ子「『原爆文学』について」（『中国新聞』一九五三・一・二五）／8 K生「原爆時代と文学」4

- 作家の焦点」（『中国新聞（夕刊）』一九五三・二・二二）／9 野間宏「原爆について」（『文学界』一九五三・三↓『日本の原爆文学』15『ほるぶ出版、一九八三・八』／10 K記者「抑圧されていた言論批判の精神よみがえる」（『中国新聞』一九五三・八・一二）／11 A Q Z「原爆で伸びる もう一步で真の作家 大田洋子」（『中国新聞（夕刊）』一九五三・八・二〇）／12 座談会「文学ひとすじ 大田洋子女史を囲んで 1 早く名がすぎた 花形作家になりたくない」（『中国新聞』一九五三・一〇・二二）／13 座談会「文学ひとすじ 大田洋子女史を囲んで 2 孤立する原爆文学 ジャーナリズムも遠慮」（『中国新聞』一九五三・一〇・二三）／14 座談会「文学ひとすじ 大田洋子女史を囲んで 3 戦争に顔をむけた文学はありえない」（『中国新聞』一九五三・一〇・二四）／15 田辺耕一郎「原爆の文学」（『文学』一九五四・一一↓『日本の原爆文学』15『ほるぶ出版、一九八三・八』／16 小田切秀雄「原子力問題と文学」（『改造』一九五四・一二↓『原子力と文学』大日本雄弁会講談社、一九五五・八↓『原子力問題と文学』15『ほるぶ出版、一九八三・八』／17 花田清輝「原子力問題に対決する20世紀芸術」（『世界文化年鑑』1955）平凡社、一九五五・三↓『原子力と文学』大日本雄弁会講談社、一九五五・八↓『原子力時代の芸術』に改題して『新編錯乱の論理』青木書店、一九五六・一〇↓『日本の原爆文学』15『ほるぶ出版、一九八三・八』／18 金井生「原爆文献 10年史 2 新聞記事が重要な資料 続いて大田洋子らの記録」（『中国新聞』一九五五・一二・二六）／19 金井生「原爆文献 10年史 6 抑圧されていた研究原爆後遺症と占領政策」（『中国新聞』一九五五・一二・三〇）／20 「ヒロシマ12年 原爆文献と作品 5 追憶から現実直視へ 国際

- 発言力の自信強まる」(『中国新聞』一九五七・八・一)／21 「原爆と文学」(『岩波小辞典 日本文学 近代』岩波書店、一九五八・六)／22 荒正人「世界文学への責務 原爆の体験と日本文学」(『読売新聞(夕刊)』一九五八・八・七) 【一九六〇年代】 23 栗原貞子「広島反省と検討 今堀誠二著『原水爆時代』を読んで」(『中国新聞』一九六〇・一〇・二二)／24 平林たい子「大田洋子さんと私」(『自伝的交友録・実感的作家論』文藝春秋新社、一九六〇・一二)／25 「星は静かに動いた ヒロシマからの報告 1 16年目の顔 たくましい明るさ 内側で訴える戦争への恐怖」(『中国新聞』一九六一・七・一)／26 「原爆に描く 2 天に焼かれる 大田洋子『屍の街』 『平和をかえせ』 涙でつづる死の歌」(『中国新聞』一九六一・七・三一)／27 「原爆文献を集めよう 六三三点にも達す 未収集加えると十倍に 中国新聞社調べ」(『中国新聞』一九六一・八・一一)／28 「原爆に描く 17 被爆者の深層心理 大田洋子『半人間』」(『中国新聞』一九六一・八・一六)／29 「この本の中で 6 『屍の街』と大田洋子さん 使命感に駆られて 血と涙で『人間』描く」(『中国新聞』一九六三・八・一)／30 栗原貞子「核時代の作家の死」(『中国新聞』一九六三・一一・一三)／31 「原爆と文学 4 直後の小説 悲惨さと苦悩を描く」(『中国新聞』一九六七・八・一〇)／32 「原爆資料の保存を考える 3 田原伯氏自力で『原点』を指向 一万点の保存に悩む」(『中国新聞』一九六八・八・八)／33 小田切秀雄「作品解説・作家入門」『日本現代文学全集 第一〇六 現代名作選 第2』(講談社、一九六九・六↓増補改訂版、一九八〇・五) 【一九七〇年代】 34 清水節治「ヒロシマ文学論・2」太田洋子「屍の街」その他」(『近代文学研究』一九七〇・六)／35 藤村健次郎「『原爆小説』二十五年の系譜」(『読売新聞(夕刊)』一九七〇・八・四)／36 「ヒロシマ25年 9 原爆と文学 原体験から思想化へ 『時間』が微妙な影落とす」(『中国新聞』一九七〇・八・三)／37 江刺昭子「広島眩暈」(『草薺』評伝 大田洋子) 濤書房、一九七一・八↓改訂新版、大月書店、一九八一・七)／38 小田切秀「現代の地獄、その証言」(『屍の街』潮出版社(潮文庫)、一九七二・七↓『日本の原爆文学 2 大田洋子』ほるぷ出版、一九八三・八)／39 「原爆告発の記録 この20年の軌跡 中 大田洋子 無視された十数年 今よみがえる『幻の作家』」(『中国新聞』一九七二・八・五)／40 長岡弘芳「原爆文学通史」(『屍の街』再読(『原爆文学史』風媒社、一九七三・六)／41 栗原貞子「八・六の意味するもの―太田洋子とG・アンデルスを軸に―」(『ヒロシマの意味』日本評論社、一九七三・六)／42 「原爆の日に大田洋子と思う 江刺昭子 見捨てられた者の苦しみがそこに―」(『中国新聞』一九七三・八・五)／43 「被爆一カ月後の市民生活つづきに 当時の新聞記事を基にまとめる」(『中国新聞』一九七五・二・二一)／44 「ある戦後30年 20 ヒロシマ作家の復権 江刺昭子さん」(『中国新聞』一九七五・二・二一)／45 「原爆告発の執念にじむ 遺族の手に戻っていた『屍の街』(大田洋子の小説)のナマ原稿」(『中国新聞』一九七五・八・八)／46 佐多稲子・林京子「戦争と女性・文学 下」(『中国新聞』一九七六・八・一六)／47 「原爆小文庫」がオープン 東京の下保谷図書館」(『中国新聞』一九七六・一〇・二四)／48 若杉慧「緑地帯 ふるさとは遠きにおいて 4 大田洋子」(『中国新聞』一九七七・四・六)／49 黒古一夫「戦後・ある呪詛と怒りの構造―大田洋子の場合」(『新日本文学』一九七

- 七・四↓「大田洋子論」に改題して『原爆とことば』三一書房、一九八三・七) / 50 巖谷大四「昭和女流文壇の開花」(『物語女流文壇史』中央公論社、一九七七・六) / 51 「原爆作家の業績忘れまい」大田洋子の文学碑建立へ 広島地方の文学関係者ら」(『中国新聞』一九七七・一〇・二七) / 52 「大田洋子の碑文募集 広島で碑建立委員会発足」(『中国新聞』一九七七・一〇・三〇) / 53 江刺昭子「大田洋子」(『日本近代文学大事典』講談社、一九七七・一一) / 54 岩崎清一郎「作家の責任」・その自覚と離反 上 大田洋子への視座」(『中国新聞』一九七七・一一・六) / 55 岩崎清一郎「作家の責任」・その自覚と離反 下 大田洋子への視座」(『中国新聞』一九七七・一二・六) / 56 「屍の街」に決定 大田洋子の文学碑」(『中国新聞』一九七八・四・二三) / 57 長岡弘芳「海底のやうな光」について」(『方向感覚』一九七八・四) ↓『原爆文献を読む』三一書房、一九八二・七) / 58 栗原貞子「大田洋子の被爆者地図を歩いて」(『未来』一九七八・四) ↓『核時代に生きる』三一書房、一九八二・八) / 59 岩崎清一郎「三人による戦後史 広島文芸の日々 100 ヒロシマへの目」(一) (『中国新聞』一九七八・六・二八) / 60 中島健蔵「『原爆文学』の意味」(『心』一九七八・六) ↓『回想の戦後文学 敗戦から六〇年安保まで』平凡社、一九七九・一二) ↓『日本の原爆文学』三一書房、一九八三・八) / 61 長岡弘芳「原爆文学と戦後ナシヨナリズム」(『歴史学研究』一九七八・六) ↓『日本の原爆文学』三一書房、一九八三・八) / 62 長岡弘芳「『屍の街』の原稿について」(『V.I.K.I.N.G.』一九七八・六) ↓『原爆文献を読む』三一書房、一九八二・七) / 63 岩崎清一郎「三人による戦後史 広島文芸の日々 104 あの日から」(一) (『中国新聞』一九七八・七・五) / 64 岩崎清一郎「三人による戦後史 広島文芸の日々 105 あの日から」(二) (『中国新聞』一九七八・七・六) / 65 岩崎清一郎「三人による戦後史 広島文芸の日々 106 あの日から」(三) (『中国新聞』一九七八・七・一一) / 66 岩崎清一郎「三人による戦後史 広島文芸の日々 107 あの日から」(四) (『中国新聞』一九七八・七・一二) / 67 「大田洋子文学碑 30日に除幕式」(『中国新聞』一九七八・七・一二) / 68 栗原貞子「非運の作家大田洋子への傷み」(『現代の眼』一九七八・七) ↓『核時代に生きる』三一書房、一九八二・八) ↓『日本の原爆文学』2 大田洋子「ほるぶ出版、一九八三・八) / 69 栗原貞子「原爆文学論争史」(『核・天皇・被爆者』三一書房、一九七八・七) 【一九八〇年代】 70 渡辺春美「『屍の街』の成立について」(『国語教育研究』一九八〇・一一) / 71 「テープにこめる被爆の恐ろしさ 広島池上さん」(『中国新聞』一九八二・六・六) / 72 「教科書とヒロシマ」4 原爆記述の歴史 規制解除で続々登場」(『中国新聞』一九八二・八・六) / 73 「原爆文学 ソ連でも関心集める」(『中国新聞』一九八二・一〇・一四) / 74 「大田洋子集」今夏刊行へ 原爆への怒り描く 「屍の街」や評論など網羅」(『中国新聞』一九八二・三・二二) / 75 「大田洋子の『屍の街』米で出版へ マ大教授が翻訳」(『中国新聞』一九八二・六・二〇) / 76 「原爆小説 海外での受け入れ今ひとつ」(『中国新聞』一九八二・六・二九) / 77 水田九八二郎「『屍の街』大田洋子著(昭和二十三年)」(『原爆を読む』一九八二・六) / 78 「被爆作家「大田洋子展」23日から平和記念館で」(『中国新聞』一九八二・七・一五) / 79 「生原稿や遺品約100点 きょうから大田洋子展 平和記念館」(『中国新聞』一九八二・七・二三) / 80 「大田洋子『屍の街』の

- 執筆場所 定説を覆す手紙」(『中国新聞』一九八二・七・二九)／81
 佐多稲子・長岡弘芳・川村孝則「解説」(『大田洋子集 第一巻』三一書房、一九八二・七)／82 浦西和彦「解題」(『大田洋子集 第一巻』三一書房、一九八二・七)／83 「原爆文獻 この1年 核廃絶の願い込め」(『中国新聞』一九八二・八・一)／84 「文学者とヒロシマ 4 大田洋子の孤立 周囲の誤解に苦悩 原爆作家特有の窮地へ」(『中国新聞』一九八二・八・六)／85 栗原貞子「大田洋子以後」(『核時代に生きる』三一書房、一九八二・八)／86 文沢隆一「大田洋子集 全4巻出版に寄せて」(『中国新聞』一九八二・一一・二)／87 リチャード・H・マイネア「私にとつての広島『屍の街』英訳に当たって」(『中国新聞』一九八三・六・二二)／88
- 「大田洋子 被爆作家の軌跡」その1 1 三つの傷 母・結婚そして原爆」(『中国新聞』一九八三・七・五)／89 「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1 2 土蔵と読書 詩集や文学書に浸る」(『中国新聞』一九八三・七・六)／90 「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1 8 「海底のやうな光」 療養中、妹宅でせん光」(『中国新聞』一九八三・七・二〇)／91 「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1 9 「屍の街」 投下直後 執筆始める」(『中国新聞』一九八三・七・二二)／92 「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1 10 米兵の訪問 強者への奇妙な屈折」(『中国新聞』一九八三・七・二二)／93 「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1 11 小説化の苦勞 原爆の重圧にあえぐ」(『中国新聞』一九八三・七・二七)／94 黒古一夫「(終末)への挑戦」(『教育国語』一九八二・三)↓『日本の原爆文学 15』ほるぷ出版、一九八三・八)／95 小田切秀雄「解説―『核』と文学」(『日本の原爆文学 2 大田洋子』ほるぷ出版、一九八三・八)／96 伊藤成彦「解説―『核』を見つめてきた眼・一九四五―一九八三」(『日本の原爆文学 15』ほるぷ出版、一九八三・八)／97 長岡弘芳「原爆文学の系譜」(『反核―文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四・四)／98 黒古一夫「原爆文学を残した人々」(『反核―文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四・四)／99 長岡弘芳「わが国原爆文学の歩み 国際ペン東京大会を前に」(『中国新聞』一九八四・五・三)／100 「ヒロシマ・ナガサキ 証言運動 1 プレスコードの時代」(『中国新聞』一九八四・七・三〇)／101 松岡直美「大田洋子の『屍の街』―原爆文学の中での位置づけ―」(『日本大学国際関係学部研究年報』一九八五・二)／102 沢田章子「『屍の街』(大田洋子)」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・八)／103 江刺昭子「大田洋子論」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・八)／104 鳥山拙「大田洋子の執念」(『さまをみる―ヒロシマ・核の黙示録』エムジ出版、一九八五・八)／105 富沢佐一「ヒロシマの『史点』 占領下の原爆文獻考 5 回顧五年原爆ヒロシマの記録」(『中国新聞』一九八六・七・七)／106 富沢佐一「ヒロシマの『史点』 占領下の原爆文獻考 27 屍の街」(『中国新聞』一九八六・八・七)／107 富沢佐一「ヒロシマの『史点』 占領下の原爆文獻考 29 原爆詩集」(『中国新聞』一九八六・八・一一)／108 富沢佐一「ヒロシマの『史点』 占領下の原爆文獻考 30 原爆詩集」(『中国新聞』一九八六・八・一二)／109 深川宗俊「原爆文学の軌跡―大田洋子論」(『民主文学』一九八六・八)／110 「ヒロシマ表現の軌跡 第一部栗原貞子と周辺 13 3人の女性」(『中国新聞』一九八七・七・二八)／111 「ヒロシマ表現の軌跡 第一部栗原貞子と周辺 15 文学者の反核署名」(『中国新聞』一九八七・七・三〇)

／112 「峠三吉『原爆詩集』の序 誕生まで」(『中国新聞』一九八七・一〇・五)／113 松岡直美「原爆文学における事実と虚構の相克」(『比較文学』一九八八・三)／114 「作品と風土 その2 屍の街 大田洋子」(『中国新聞(夕刊)』一九八八・八・一)／115 江刺昭子「大田洋子・ヒロシマからの遺書 チェルノブイリと原爆と」(『世界』一九八七・九) **【一九〇年代】** 116 「ヒロシマー三人の証人 米国で英訳出版」(『中国新聞』一九九〇・四・三)／117 「大田洋子著『屍の街』を出版 広島読書グループ 絶版で入手困難」(『中国新聞』一九九二・五・二)／118 山本千恵『追い風の女たち 女性文学と戦後』(大月書店、一九九二・五)／119 柳沢孝子「屍の街」(『日本現代文学大事典 作品篇』明治書院、一九九四・六)／120 塚原理恵「大田洋子『屍の街』」(『民主文学』一九九四・七)／121 John Whittier Treat, *Writing Ground Zero: Japanese Literature and the Atomic Bomb*, Univ of Chicago Press, 1995→ジョン・W・トリート「三つの論争」(『大田洋子と語り手の位置』(『グラウンド・ゼロを書く』水島裕雅他訳、法政大学出版社、二〇一〇・七)／122 塚原理恵「大田洋子『屍の街』が語りかけるもの」(『民主文学』一九九五・六)／123 「検証ヒロシマ1945〜95 25 文芸」(『中国新聞』一九九五・七・九)／124 小田切秀雄「解説 核時代の開始と文学」(『屍の街・半人間』講談社(講談社文芸文庫)、一九九五・七)／125 黒古一夫「作家案内―大田洋子」(『屍の街・半人間』講談社(講談社文芸文庫)、一九九五・七)／126 堀場清子「原爆作品群から」(『原爆 表現と検閲 日本人はどう対応したか』朝日新聞社、一九九五・八)／127 浦西和彦『大田洋子』編 解説」(『作家の自伝 38 大田洋子』日本図書センター、一九九

五・一一)／128 「社説 C T B T 超え核廃絶へ歩もう」(『中国新聞』一九九六・六・二九)／129 水田九八二郎「原爆文献を読む 原爆関係書 2176 冊」(中央公論社、一九九七・七)／130 広島女性史研究会編著『ヒロシマの女たち 続』(ドメス、一九九八・四) **【二〇〇年代】** 131 菅本康之「歴史のトラウマ―大田洋子論」(『社会学』二〇〇一・六)／132 「2001年被爆者の伝言 物故者編 上」(『中国新聞』二〇〇一・七・二二)／133 川口隆行「原爆文学という問題領域―「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは「原爆文学史」」(『Problematic <文学/教育>』二〇〇一・七)「原爆文学という問題領域」(創言社、二〇〇八・四)増補版、二〇一一・五)／134 鹿野政直「核時代の思想(屍の街)」(『日本の近代思想』岩波書店、二〇〇二・一)／135 花田俊典「原爆言説の日本的形成―記憶の形成と証言台の証言人」(『原爆文学研究』二〇〇二・八)／136 内田友子「不謹慎のゆくえ―体験をめぐる」(『原爆文学研究』二〇〇二・八)／137 島谷謙「原爆文学論―峠三吉、大田洋子、原民喜」(『世界文学』二〇〇三・一一)／138 長谷川綾子「大田洋子『屍の街』」(『民主文学』二〇〇四・三)／139 亀井千明「大田洋子論・序説―(原爆作家)としての神話/からの逸脱―」(『原爆文学研究』二〇〇四・八)／140 江刺昭子「戦時下の自己実現のゆくえ―生産・大陸文学の旗手 大田洋子」(『私たちの戦争責任』東京堂出版、二〇〇四・九)／141 津久井喜子「大田洋子」(『破壊からの誕生―原爆文学の語るもの―』明星大学出版部、二〇〇五・七)／142 亀井千明「昭和二五年版『屍の街』の文脈―大田洋子が見極めた被爆五年後」(『原爆文学研究』二〇〇五・八)／143 黒古一夫「人間の眼と作家の眼―大田洋子『屍の街』『半

人間』ほか（『原爆は文学にどう描かれてきたか』八朔社、二〇〇五・八）／144 「被爆体験小説『屍の街』作者 広島で大田洋子展」（『中国新聞』二〇〇六・九・九）／145 亀井千明「大田洋子と原爆と志賀直哉―原爆に対する文学的作用をめぐって」（『原爆文学研究』二〇〇六・一〇）／146 「大田洋子の人物像探る 市民の会ミニシンポ 作品の再評価必要」（『中国新聞』二〇〇六・一二・一四）／147 フランチェスコ・コモッティ「大田洋子論―『屍の街』を軸として」（『大田洋子を語る 夕風の街から』広島に文学館を！市民の会、二〇〇七・七）／148 桐谷多恵子「論文題名 戦後広島“復興”における青年運動に関する覚え書き―宍戸・勝丸両史料の批判的考察に寄せて」（『法政大学大学院紀要』二〇〇七・一〇）／149 岩崎文人「GHQ/SCAP 占領下の大田洋子」（『国文学叢』二〇〇八・三）／150 柳沢孝子「屍の街」（『現代小説大事典』明治書院、二〇〇四・七↓増補縮刷版、二〇〇九・四）

【二〇一〇年代】 151 「大田洋子しのび文学碑 作品で紹介 前住職が建立」（『中国新聞』二〇一〇・七・三〇）／152 中野和典「主体のゆらぎ―大田洋子『山上』を中心に」（『原爆文学研究』二〇一〇・一二）／153 竹内栄美子「女性作家が書く（4） 大田洋子『屍の街』（『日本古書通信』二〇一〇・一二）／154 小林孝吉「原爆の記憶と文学の責任―大田洋子『屍の街』『人間檻樓』（『社会文学』二〇一一・二）／155 成田龍一「解説 ヒロシマ・ナガサキの証言と記憶」（『コレクション 戦争と文学』19 ヒロシマ・ナガサキ』集英社、二〇一一・六）／156 山本昭宏「占領下における被爆体験の「語り」―阿川弘之「年年歳歳」「八月六日」と大田洋子『屍の街』を手がかりに」（『原爆文学研究』二〇一一・一二）／157 野口存弥「特集 震災・戦争と文学 大

田洋子と原子爆弾―人間の不幸へ注ぐまなざし」（『群系』二〇一一・一二）／158 板倉大貴「花田清輝「原子時代の芸術」論―アヴァンギャルドの理論と原水爆／原子力」（『表現技術研究』二〇一五・三）／159 黒古一夫「情緒的反戦意識の行方―被爆作家・大田洋子の場合」（『戦争の記憶と女たちの反戦表現』ゆまに書房、二〇一五・六）／160 村上陽子「原爆文学と批評―大田洋子をめぐって」（『言葉が生まれる、言葉を生む』ひろしま女性学研究所、二〇一三・八↓『出来事の残響 原爆文学と沖縄文学』インパクト出版会、二〇一五・七）